



養豚経営において、浮腫病は離乳子豚の一部でまぶたの腫れや神経症状を呈して急死する、経済的損失の大きい疾病の一つです。

当センターにおいても、離乳から100日齢（体重50^{kg}程度）の子豚で浮腫病による死亡事故が多く発生したため、炭酸亜鉛の添加や抗生剤の投与を適宜行っていました。

しかし、欧州連合（EU）では環境負荷低減のため高濃度炭酸亜鉛の使用が禁止され、国内においても薬剤耐性菌問題により抗菌性飼料添加物の指定が見直されるなど、今後、重金属類や抗生剤に過度に依存しない飼養体系が求められています。

離乳子豚の浮腫病ワクチン 接種で事故率が低下 コスト面も従来同等

浮腫病ワクチンの接種が肥育前期豚の浮腫病様事故率等に及ぼす影響

区分	炭酸亜鉛 添加 (%)	浮腫病様 事故率 (%)	日増体重 (kg/日)		浮腫病 対策経費 (円/頭)
			去勢	雌	
ワクチン 未接種区	0.30	24.1	—	—	405.6
ワクチン 接種区	0.30	2.5	0.80	0.74	374.2 ¹⁾
	0.15	0.0	0.78	0.75	

1) ワクチン接種区の浮腫病対策経費は炭酸亜鉛添加量0.15%で計算した
※2021年4～12月に離乳した子豚280頭を用い、体重約20～50kgの肥育前期豚を調査した

2021年度から浮腫病ワクチンの販売が開始されたことから、その接種が肥育前期の事故率改善に及ぼす効果を検証するとともに、炭酸亜鉛低減の影響について調査しました。

その結果、ワクチン接種により事故率が24.1%から2.5%へ大幅に改善されました。また、ワクチンを接種した場合、炭酸亜鉛の添加量を

0.3%から0.15%へ半減しても事故率に影響を及ぼすことなく、日増体重も同程度でした。

浮腫病対策経費は炭酸亜鉛の低減や治療にかかる抗生剤の使用量削減によって、ワクチン経費増加分を十分に補えることが分かりました。

（県農林技術開発センター 畜産研究部門 中小家畜・環境研究室主任 高木豪）